J-33

国立青少年自然の家での水辺の活動プログラム関する研究

Research concerning program activities on the water in the water in the home of the National Youth Nature

○高橋知子 [1]，近藤健雄 [2]，山本和清 [2]
*Tomoko Takahashi[1],Takeo Kondo[2] ,Kazukiyo Yamamoto[2]

Abstract: Development of human can act with awareness and sensitivity to the environment is deployed in environmental education. Environmental education has become a new challenge education in our country. It is necessary to include the experience on the social environment and in real life, deepen the understanding of the social environment and the natural environment. However, if you have selected the water the field of environmental education, the content and purpose of the activity is also different from the land. There are any problems, way of evaluation of environmental education and safety, in the uncertain status quo for achievement. From the point of view of the three way, activities and safety management of the evaluation of the achievement of the goal of environmental education of water, it is an object that you consider the nature of the environmental education of the waterfront in the future in the present study.

1. 研究背景

環境問題が深刻化する中，解決策の一つとして，環境に対する豊かな感受性や見識をもって行動できる人間の育成を図る環境教育が展開されている．

我が国において環境教育が定着したといえるのは，1980 年代に入ってからである．環境庁や文部省が指針や施策により環境教育の推進を行い，学校教育にも徐々に環境教育を導入する体制が整えられていった．そして，「環境」「国際理解」「情報」「福祉」「健康」などをテーマに小・中・高等学校に取り入れられた．これにより，環境教育の取り組みも高まりをみせている．しかし，このように環境教育の推進は行われているものの，教育関連法や学習指導要領で環境教育を明確に位置づけていない．また，環境教育の場を水辺に限定した場合，陸地とは活動の目的や内容も異なり，安全面などの問題点も多く，環境教育の中での評価の仕方，達成度について不明確な現状にある．

2. 研究目的

水辺の環境教育には①目標・達成度評価，②地域の特色を活かした活動，③安全管理，④閑散期での水辺の活動プログラムの活かし方の 4 つに分類できると考えた。そこで本研究では今後の水辺の体験型教育プログラムを作成する目的で，目標と達成度の評価の仕方・活動内容・閑散期での水辺の活動プログラムの活かし方・安全管理の 4 つの視点から水辺の環境教育のあり方を検討することを目的とする．

3. 研究方法

本研究では，全国 28 ケ所あるうちの水辺の活動プログラムを実施している 20 ケ所の国立青少年自然の家・交流の家を対象に，水辺の環境教育のあり方を検討する．

ここで，全国青少年自然の家 28 ケ所を Figure1 に示す．文献・アンケート調査により環境教育の目標，および対象者の年齢別の目標を設定，また水辺の活動内容・達成度の評価を把握する．

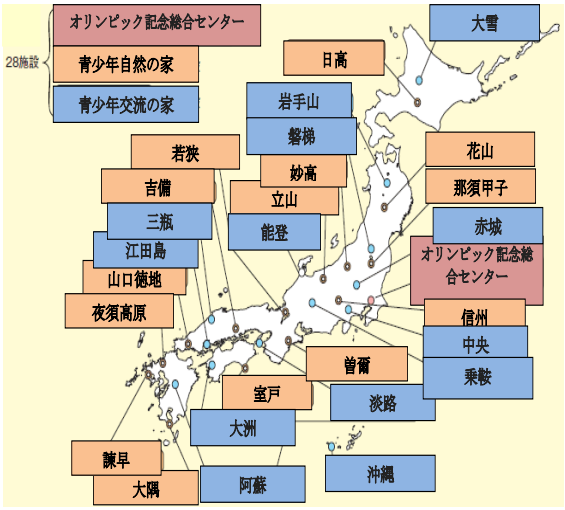

Figure1. 28 places in the National Youth Nature Houses

4. 環境教育の目標の把握

環境教育に関する会議や指針[*1]などで掲げられている目標を把握し，使用されているキーワードを抽出した．

これより環境教育の目標を以下の 6 つに分類する．

①環境と環境問題に対して「関心」をもつ
②人間と環境のかかわりについて「理解」する
③環境の状況を「評価」する
④環境の保護と改善の為の「態度」を育む
⑤問題解決の為の「行為」ができる「技能」を身に付ける
⑥問題解決の為の活動に「参加」する

これをもとに発達段階において，特に強調する目標を

1：日大理工・学部・海建　2：日大理工・教員・海建

設定しFigure2に示す．Figure2の目標を特に強調したプログラムをたて，実施していくことが望まれる．しかし年齢のみならず対象者が身に付けている知識や経験なども考慮していく必要があると考えられる．そのため対象者の年齢や知識・経験などのデータを事前に把握し，プログラムを作成していくことが望まれる．これらの目標は発達段階に応じて徐々に身に付け最終的に環境に配慮した行動ができる人材の育成を図るべきである．

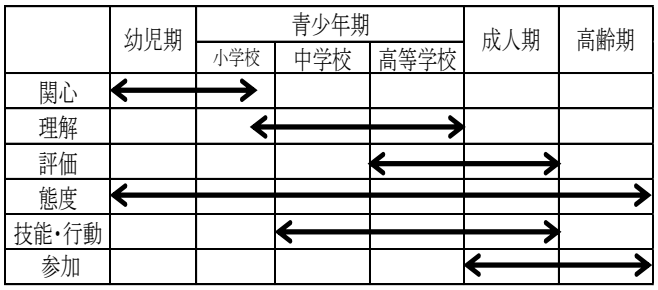

Figure2.The goal of environmental

5. 国立青少年自然の家・交流の家の概要及び活動内容

5.1 国立青少年自然の家・交流の家の概要

国立青少年自然の家・交流の家の概要は以下の通りである．

「児童，青少年を自然に親しませ，自然の中での集団宿泊生活を通じてその情操や社会性を豊かにし，心身を鍛練し，健全な少年の育成を図ることがその目的である．そのため，自然環境の良い山や高原や湖畔，海岸などに設置されている．学業の休みになる夏休みや冬休みのような長期休暇の時期にのみ開催される臨海学校や林間学校と決定的に異なり，年間を通じて運営されるというのが大きな特徴である．」とされている．

5.2 国立青少年自然の家・交流の家の目標・達成度評価

各国立青少年自然の家・交流の家にアンケート調査を行い，アンケートは回答待ちの段階である．環境教育の分類された 6 つの目標をもとに，水辺のプログラムを項目別に「習得」「狙い」「達成目標」などの把握をする．それぞれのプログラムに，6 つの目標がまんべんなく満たされているプログラムを高い評価とし，各国立少年自然の家・交流の家から集計・分析する．

5.3 国立青少年自然の家・交流の家の活動内容

国立青少年自然の家・交流の家において実施されている水辺の活動を水辺の学習と体を動かすプログラムに分類し，Table1 に示す．全 21 種が実施されており，これらのプログラムはその地域ならではの地形や特色に応じて実施されている．それぞれの地域の特色を活かした活動を行うためには地域を熟知する人々の協力が必要である．また環境や環境問題を身近なものとして感じるためには，これらの活動を通じて各国立青少年の家・交流の家の特色を活かした環境教育を行うことが必要である．

Table1.Activities of the National Youth Nature Houses

水辺の学習	体を動かすプログラム	
川の学習	カッター	ラフティング・ボディラフティング
	水泳	サンドクラフト
磯の観察	カヌー	シュノーケリング
	海釣り	ゴムボート
海辺・海中の生物観察	いかだ	オーシャンカヤック
	磯遊び	渓流釣り
ビーチコーミング	川遊び	ミニクルージング
	海水浴	ビーチのクリーンアップ

5.4 国立青少年自然の家・交流の家のおける閑散期の水辺の活動プログラムの活かし方

現段階では、アンケートの回答待ちである．文献より，閑散期の水辺の活動はスポーツ活動や冬に捕れる魚を地引網で獲るという活動がなされている．このように，工夫はされているものの，閑散期の水離れと繁忙期との差が開いているのが現状である．これらの問題点を分析し，季節を問わず水辺の活動を充実させることでさらなる水環境教育の発展が期待できる．

6. まとめ

本研究では，水辺の環境教育を行う際に明確な目標が必要であると考える．水辺の環境教育を行うには，対象者に合わせた目標を明確にしたうえで，プログラムの計画をたてる必要がある．そこから，どのような対象者にどの目標を身に付かせるかが重要となってくる．そこで，6 つに分類した環境教育の目標を示し，アンケート調査を各国立青少年自然の家・交流の家に実施した．現段階では回答待ちであるが，目標がまんべんなく満たされているプログラムを高い評価とし，集計・分析する．また，問題点である閑散期の水離れと繁忙期との差の開きを把握することで，季節を問わず水辺の活動を充実させることができ，さらなる水辺の環境教育の発展が期待できる．

≪参考文献≫

[1]川での福祉・教育研究会編著：「水辺の元気づくり―川で福祉・教育活動を実践する―」，理工図書，2002 年 11 月 20 日
[2]今井清一著：「日本の環境問題と環境教育」，晃洋書房，1996 年 6 月 20 日
[3]伊藤和明著：「自然とつきあう―実りある環境教育のために―」，明治図書，1987 年 5 月
[4]石井智恵：「海の環境教育に関する基本的研究自然」，2001 年
[5]石野大輔：「海の環境教育における安全管理に関する基本的研究―三番瀬における活動プログラム主催者の安全管理―」，2002 年
[6]小田川晶：「海の環境教育における安全管理に関する研究―三番瀬における環境教育の安全管理―」，1996 年

≪補注≫

[*1]ベオグラード憲章 2 年後の 1977 年に環境教育に関する世界初の政府間会議である環境教育政府間会議（通称・トビリシ会議）が旧グルシャ共和国の首都・トビリシで開催された．環境教育政府間会議「トビシリ宣言」